



TITLE:

<書評>西井凉子著:『情動のエスノ
グラフィ--南タイの村で感じる・つ
ながる・生きる』京都大学学術出
版会、2013年、3,000円＋税、
286頁

AUTHOR(S):

菅原, 和孝

CITATION:

菅原, 和孝. <書評>西井凉子著:『情動のエスノグラフィ--南タイの村で感じる・つながる・生きる』京都大学学術出版会、2013年、3,000円＋税、286頁. コンタクト・ゾーン 2014, 6(2013): 246-252

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198472>

RIGHT:

西井涼子著

『情動のエスノグラフィ ——南タイの村で感じる・つながる・生きる』

京都大学学術出版会、2013 年、3,000 円＋税、286 頁

菅原和孝

民族誌家は「女には向かない職業」¹ではない。年代記風の再構成によって女探偵りょうこ²の探索を追う。対応する章番号を《 》に、評者の注記を〔 〕に挿入する。舞台は南タイ西海岸サトゥーン県北部の農漁村 M 村、人口およそ 600 人、世帯数 130 《1》。物語の最初の種子は 1925 年にヤーイ・チットという女兒が生まれたときに蒔かれた。11 年後の 1936 年にりょうこ深い関わりをもつことになる女ナー・チュアが生まれた。翌年、父親の夭折後、母は再婚し、4 歳年下のナー・リが生まれた。その母もナー・チュアが小学 2 年のとき病死する。母方の祖父母にひきとられ、12 歳で小学校 4 年を終えたあと母の妹（叔母）夫妻にひきとられ M 村にくる。叔母の夫は仕掛け網漁師で、その手伝いをしていた貧しい少年は長じて蓄財に成功し、老後のナー・チュアを経済的に支援する《7》。

1950 年代にナー・チュアは 17 歳と 22 歳の 2 度にわたり婚約したが、「奥手」な彼女は村の守り神ト・ナーンに結婚しなくてよいように願掛けする。「そのおかげか」一生を未婚で過ごす〔彼女のセクシュアリティの分析としてあまりに表層的〕。1960 年、24 歳になると町で美容師と裁縫の技術を身につけた。数年後、妹ナー・リが妻子のある男に強姦され妊娠した。妹はその男と結婚し四男一女をもうけた。ナー・チュアは 2 年ほど町暮らしをしたが、30 歳の頃 M 村に帰ってくる。恋仲になった小学校教員から花模様の表紙がついたノートを貰い、それをずっと大切に使う。1970 年にナー・リに末娘ジンが生まれた。翌年、夫と 8 歳の長男は舟で漁をしている最中に「殺し屋」に銃撃され殺された〔詳細不明！〕。最初に登場したヤーイ・チットは警官と結婚し子どもを 5 人もうけたが、夫は職場で問題を起こして退職し妻の出身村に移り住んだ。1976 年頃夫は薪割り中に斧で足を切り、出血多量で死んだ。

ナー・リは 1974 年に M 村に戻り、炭焼き工場で働きながら子どもたちを育てた。姉ナー・チュアは美容師業で金を貯めた。1977 年（41 歳）、叔母から借りた土地に家を見て、

SUGAWARA Kazuyoshi 京都大学大学院人間・環境学研究科

1 イギリス・ミステリーの女王 P・D・ジェイムズの諸作では、『女には向かない職業』（小泉喜美子訳、ハヤカワ・ミステリ文庫、1987 年）で初めて登場した女探偵コーデリア・グレイが活躍する。

2 語りの転写資料で著者自身が発言しているとき、その名前は「りょうこ」と表記されている。

妹一家が同居する。成長した子どもたちは北の町で漁業に従事し、ナー・リもついて行く。

1985年、ラットという37歳の男が村で初めてエビ養殖を始めた《3》。しばらくして、ムスリムのカチャという女がひっそり舞台上に登場する。最初の夫と別れたあと二番目の夫とM村に移入してきたときは身ごもっていた。この子も含めて6人の子をもうけることになる《4》。ここでやっと、りょうこ登場。留学生の彼女はバンコクでのパーティーで眼光鋭い人類学者に会う。その目の光に導かれるように自らも人類学への道を歩む。1987年、初めてM村を訪れた彼女を迎えたのが小学校教員で好奇心旺盛なクルー・ノームだった。校庭に机を並べ手料理で歓迎会をしてくれた。りょうこは仏教徒とムスリムが半々の割合で混住し、両者が通婚するときは配偶者のどちらかが改宗するという臨機応変な宗教実践をテーマに1年4ヶ月の調査に邁進する〔西井 2001〕。仏教徒の家に居候したが、その妻もムスリムからの改宗者だった。四男一女のうち次男以下3人の息子たちが同居していた。約20年後に夭折することになるノンは第四子で三男だった《6》。同じ頃、ナー・リはM村に戻った。1988年には娘のジンが18歳で長女プラーを出産する。りょうこは、わかした湯を魔法瓶に溜めてあるナー・チュアの家でコーヒーの瓶を預け、毎朝ここでくつろいだ。1989年に2度目の調査を始めたときは、ナー・チュアの家で居候することにした。

多数の村人がエビ養殖に参入したのは1990年代に入ってからだ。この事業は高いリスクを伴う。養殖池に大量の栄養剤・飼料・薬を投与するので、池底にヘドロ状の泥が堆積する。1年に2作水揚げできるが、莫大な利益を上げられるのは最初の2年ほどだ。りょうこの歓迎会を開いてくれたクルー・ノームは、1990年に再会したときにはカード賭博に入れあげ多額の借金をつくっていた。親の支援でギャンブル狂いを脱したのも束の間、エビ養殖に手を出し窮境へ落ちていく《3》。1993年ナー・リの娘ジンは次女ケーを出産した。1994年エビ養殖が最盛期を迎えた頃、不思議な事件が起きた。養殖池に雇われていた北タイ出身の青年が行方不明になった。5日目にひょっこり現れた彼は、洞窟で老人から木の根を与えられて食べていたと語った。守り神ト・ナーンに違いない。1995年ごろか、ジンは8歳のプラーと2歳のケーを置いて出奔する。翌々年(1997)りょうこは生後7ヶ月の長男と共にバンコクに3ヶ月滞在し、ナー・チュアが子守に来てくれた。留守中、小学1年生だったナー・リの孫のケーが、彼女の宝物であった花柄表紙のノートを持ち出し落書きしてしまう。バンコクから帰ったナー・チュアはカンカンになったが、分別のない子を激しく叱ることもできず、落書き部分を破って捨てた。おかげでノートはだいぶ薄くなってしまった。

同じ年にカチャは他県出身の仏教徒の男と駆け落ちした。その次にりょうこがM村を訪れた時には、カチャはこの男とも別れ、彼の甥〔親族関係の詳細不明〕にあたるカムと同棲を始めていた《4》。エビ養殖の創始者ラットの父方の叔父リエンは甥に雇われ、上半身裸で赤い腰布を巻いて養殖池で働いていた。1998年、リエンは池のモーターに腰布を巻きこまれ水死した。ヤーイ・チットには5人の子〔詳細不明〕がいたが、中部タイでトラック運転手をしていた末息子一家と同居した。息子が交通事故で死んだのを機にM村へ帰ってきた。

2002年6月にりょうこは数日だけ村に立ち寄った。M村の助役で趣味人のチャイ（63歳）は彼女にツバメの巣を見せるために近くの島へ舟を出してくれた。9月21日、雨の朝、チャイはカニの罟を仕掛けに海沿いのマングローブ林に出かけ、カム（53歳）に斧で殺害される。12月にりょうこは村を訪れ事件を初めて知る。殺人の真相を求める探索は2003～4年にも継続される〔マングローブ林の中で身をかがめて歩く姿勢から加害者と被害者の身体の配置を推測するくだりは圧巻である〕。カチャ（47歳）とチャイの姦通は昔から潜行していた。カムはカチャにせがまれ家まで建てたのに冷遇された。2004年にりょうこが刑務所でカムに面会したとき、彼は、土地問題をめぐるチャイとの確執を殺害の動機として強調した。

2003年末にはクルー・ノームは追いつめられていた。りょうこを空港へ送る車中で、「もう未来は尽きてしまった」と呟いた。エビ養殖に参入した15人中12人が巨額の損失を蒙った。2004年にクルー・ノームはエビ養殖から完全に足を洗う。ある資本家が市街地の土地を貸してくれたので、郷土料理の店を開き、500万バーツの借金を返し続ける。舞台はM村近くのT学校（中学・高校にあたる）に移る《2》。地域住民の大半はムスリムで、T校の生徒も80%がムスリムである。2004年11月に4人の生徒が失神したことが一連の集団憑依の発端だった。約3ヶ月にわたり生徒が次々と憑依し、まともに授業もできなかった。主要な原因とされたのは9月に赴任した仏教徒の女校長が、土地神への供犠（ヤギを屠りそのカレーを供える）を禁じたことである。この校長は翌年の2月初めにM村の小学校の校長へと転任した。T校では土地神への供物を再開し、2月10日を最後に生徒への憑依は収まった。6月にりょうこはT校を訪れ、事件の経過を聞きとった。

2006～7年頃か〔正確な年月日は不明〕殺人犯カムは恩赦による減刑で釈放された。りょうこの面会では、釈放されたらM村に帰るともらしていたのに、帰ってこなかった。

2008年4月、最初の調査のとき同居した一家の三男ノンがエイズで死亡した。享年40歳。直接の死因は、抗レトロウィルス剤の服用で劇症アレルギーが出たのに医師に相談せず服用を続けたためらしい。体の肉が腐り強烈なおいを発していた。りょうこが村を訪れたのは死後100日法要の前日であった。家族や村人からノンが死に至る経過や葬儀の様子を聞きだす。ノンの死後も家族や親しい友人は腐臭を感じるがあったという《6》。

2011年、仏教徒の行事・十月祭が始まる前日〔西暦の日付不明〕ヤーイ・チットが86歳で死んだ。満潮時に入水したらしく干潮の水辺で発見された。腰布が流され大人用オムツがむき出しになっていた。娘のウィンは改宗してムスリム男性と結婚して3人の子をもうけたが、数年前に離婚した。母親と同居もせずほったらかしていた。孤独感と忿懣が彼女を自殺へ追いやってたらしい。だが、近所に住む「ペン先生」は老人の徘徊癖がまねいた事故死だと断定した。村人たちの関心は、子が親の面倒をみないことに集中した《5》。

2012年、りょうこは23年間身を寄せてきた家の主人ナー・チュア（76歳）に探索の焦点を合わせる《7》。コウモリの群れが夕方に飛来する家の描写からはじまり、花柄表紙のノートへ関心は引き絞られていく。彼女に金銭的な援助を続けてきた人びと、および彼女が功德を「転送」した死者たちとの複雑な関係性のネットワークが浮かびあがる。最後

に、りょうこはひとつの洞察に達する。彼女に期待されている最重要事は、ナー・チュアの葬式をきちんと出す手助けをすることである、と。だが、民族誌は探偵小説のように大団円で終わることはない。りょうこの大切な人たちの生活はこれからも連綿と紡がれていく。いつかりょうこがこの舞台から退場してもずっと。

本書の構成——序章 情動のエスノグラフィにむけて／第1章 混住するムスリムと仏教徒／第2章 集団憑依——伝染する情動／第3章 クルー・ノーム——「のめり込む」生／第4章 チャイ——「姦通殺人事件」／第5章 ヤーイ・チット——老女は自殺したのか／第6章 ノン——死のにおい／第7章 ナー・チュア——人と家と「私＝民族誌家」。

この複雑な物語に年譜を付さなかったのは著者（＝西井）の怠慢である³。それを差し引けば、本書の民族誌記述は良質の探偵小説のように読む者をわくわくさせる。そのことを確認したうえで、著者が用いた方法と分析概念への疑問を提起して批評にかえたい。

時間性：評者（＝菅原）の苦心作である年代記と本書の構成を対比するとき、膨大な出来事が著者の調査期間よりもずっと前に起きていたという自明の事実が浮かびあがる。語りの分析という方法によって、「民族誌的現在」より何倍も長い時間が私たちの視界に嵌入する。しかも登場人物たちを襲った出来事の多くは相互に何の連関ももたない。この黙せる堆積こそが生の偶有性である。それを6つの章に切り分け、各切片を首尾一貫した物語へと組織した瞬間に、著者は、偶有的な世界に堅固な時間性を与えた。小説の「文体」の核心は時間性の表現にあり、独自の文体を掴みとることこそ作家の「行動」である〔江藤 1959/1967〕。著者が選んだ「行動」が、彼女の意に反して、生の偶有性という「毒」を中和する効果をもたらしたのではないか⁴。少なくとも著者にはそう自問する責任がある。

情動：affectus はスピノザに由来する概念だという。しかしその邦訳で「感情」と訳されている語を「情動」と訳し変える必然性があつたのだろうか。情動に対応する英語は emotion であり、心理学的な負荷が強い。この用語選択を行うことが不可避であるならば、著者自身のことばで定義してほしかった。著者も引用しているように、評者は、行為空間の構造と不可分に結びついた表情をおびた身ぶりとして感情を定義した〔菅原 2002〕。そのねらいは、感情を心理的実体として措定することを拒むことにあつた。しかし本書の「情動」は心理学化への傾斜を払拭していないように思える。集団憑依の謎を「情動の伝染」として解き明かすこと自体に、物象化への誘惑が忍びこんでいないだろうか。

3 ジェームズ・エルロイの LA 4 部作の最終巻『ホワイト・ジャズ』（佐々田雅子訳、文春文庫、1999 年）の巻末には訳者の労作である詳細な年譜が付けられている。

4 サルトルの『自由への道 第2部 猶予』（佐藤朔・白井浩司訳、人文書院、1959 年）のように相互に無関係な生者と死者に起きた出来事を「同時性」のみに注目して並列することさえ可能である。

重層性：評者には、著者が用いる「重層的」という概念がよくわからない。「エビ養殖とは、景観の変化といった想像され共有された経験と、個々の関わり方による差異化された経験といった重層的な出来事であった〔後略〕」(p.116)。だが、共同体を襲う出来事に巻きこまれつつ個人が変異に富んだ行為を選ぶことは社会の普通の姿である。重層性とは上位の行為空間で優先する応答可能性が下位の行為空間を少なくとも部分的に規定することにこそふさわしい概念である。

さらに、エビ養殖に失敗した村人たちの苦闘から「個の生のあらがいがたい情動の流れとしての偶然性の受容と、そこから可能なかぎりよりよい生を求める能動性から現実が生成されている」(同頁)という洞察が導かれる。だが、事業拡大に失敗して倒産した、といった悲惨は私たちの日常生活の傍らにある。上の総括はこうした平凡な悲惨から遊離してはいないか。事業への投資は狭義の意図的行為である。間身体的な行為空間を前提にしなければ了解不能な集団憑依と、意志的なやりくり算段との双方を「情動の流れ」に落としこむことは、概念それ自体の空洞化を招きよせる。

もうひとつ、著者は景観に注意を向けながら、海と河に両側を挟みこまれ、半島のように細長い村の特異な地勢になんら言及していない。潮の匂い、湿気、風の強さ……それらに揺さぶられる感覚こそ「特定の自然環境」に埋めこまれた人間にとって本質的ではないのか。

マテリアリティ：なぜ「物質性」ではなく、一般読者にはなじみが薄いこの英語を使う必要があるのか。著者自身が「身体の物質性は生にとっては究極の受動性として経験される」(p.262)という心揺さぶられる一文を書きつけているだけに疑念は晴れない。

因果応報：娘が老いた母親を親身に世話しなかったことがヤーイ・チットの不審な死の原因だったことは確かだ。だが、村人の語りが因果応報に収斂したことは奇異の感を抱かせる。このロジックに説得力をもたせるには、ヤーイ・チット自身が若い頃に親を冷遇したという論証が必要であった。転写資料を読み直すと、因果応報を最初に口にしたのはりょうこ自身であったことに気づく。これは誘導尋問ではなかったのだろうか。

偶有性：本書のもっとも根源的なモチーフは、生に満ち溢れる偶発性や受動性を必然性として引き受けることである。民族誌家の生が偶然を必然に変える実践の積み重ねであることに疑いの余地はない。毎年、ともかく行こう、と(惰性でもよいが)決意し、スーツケースの用意を始めるのだから。だが、「引き受ける」可能性を最初から剥奪された圧倒的多数の人びとがいる。評者の近所でも徘徊老人が家と家の隙間に迷いこんで凍死したことがある。著者のレトリックからは、平凡な悲惨をなんとか浄化したいという祈念が透けて見える。そもそも、世界・内・存在の根本条件としての被投性＝偶有性をいかに乗り越えるかこそ、実存主義の根源的な問いかけだった。受苦を生きぬく起死回生の拠点としてサルトル的「自由」へ復帰する試みもある〔Jackson 2005〕。だが、「自由」への決意に出撃点を定めることは、著者が自らを懸けようとしている「受動性」から背馳するだろう。

覚悟／諦観：「諦念」ならばわかる。評者も日常語としてたまに使う。おそらくわれわれの日常にも仏教徒の感覚が忍びこんでいるのだろう。だが、これとハイデッガーの覚悟性とは両立しない。すばらしい『存在と時間』は第二編から様子がおかしくなる。覚悟性とは「現存在自身においてその良心によって臨証される本来的な開示態である」[ハイデッガー 1994: 156]。それは、気分のなかに頹落しおしゃべりに耽る日常的な「ひと」を超え出る「際立った」投企である。要するにエリート主義なのだ。ナチズムへ傾斜したハイデッガーの精神主義^{メンタリズム}はここに胚胎している。それは偶有性に翻弄される「現地の人たち」に同伴することを希求する著者（と評者）の身構えとは相容れない。

生成変化：《なる》こと（devenir——「生成変化」は訳しすぎだ）。たしかに『千のプラトー』第10章は圧倒的な啓示に満ちている[ドゥルーズ & ガタリ 1994]。原著はソ連崩壊より10年近く前に刊行された。フランス現代思想の「速さ」に比べると極東のわれわれはあまりにも「遅い」。何よりも衝撃的なのは、ドゥルーズたちが経験主義的な論証からも現象学的記述からも訣別し、知の制度化とテリトリー化を根底から破砕し、生き方の総体を変更するよう読者を挑発していることである。彼らの言表はコミュニケーションでさえないのだから[ドゥルーズ & ガタリ 1997]、フランス語を母語としないわれわれが真に理解できるか疑わしい。だが、著者には逡巡の気配が微塵もない。憑依した生徒たちには「校長に従順な存在たるべき生徒から脱して、別のものになろうとする欲望はあったといえる。ここでは欲望は、身体から発して、自らを生成変化させる力（＝情動）となるという意味で「欲望」をもつといたい。精霊は、生徒の身体の力能のもつ情動により、潜在性を具現化させる生成変化の途上に出現している〔後略〕」（p. 74）。奇妙な論証だ。情動は欲望へと横すべりするが、欲望それ自体は定義されない。要するに、生徒たちはいつとき精霊に《なった》のである。だが、これでは、集団憑依という謎はなんら説明されたことにならない。何よりも、著者自身が、偉大な哲学者（思想家）の創った特異な「概念」に身を委ね、自分のことばで了解する努力を放棄している。別の存在に《なる》ことへの悲痛な希求を、評者も著者と共有していると推測する。だからこそ、「逃走線」が破滅の危険に満ちていることへのドゥルーズたちの執拗な警告に敏感にならざるをえない。《なる》ことへ身を投じるなら、制度化された形式に則って民族誌を書くことはそもそも不可能になるだろう。

語り口：語りの転写資料はこの種の民族誌の生命である。だが、なぜかくも発話文がぶっきらぼうで意味がとりにくい箇所が多いのだろう。著者の注記を豊富に挿入すれば、理解はもっと容易になっただろう。また、一人称代名詞が使われず、語り手が自らを個人名で指示することに興味をひかれた。これがタイ語の口頭言語の特性なのであれば、言語それ自体への論及が不可欠であろう。さらに、「姦通」という煽情的な（順応主義的な？）用語を使うなら、それに対応する現地語の意味場を分析することが必須である。

著者が調査を始めた頃、評者は異文化の日常会話の分析を始めつつあった。その後、著

者と同じ歳月、ひとつのフィールドに通い続けた。それだけに、二つの社会とのあいだで「微妙なバランスをとることがもはやできなくなっている」(p. 4) という著者の告白にとっても共感した。この書評のビターさも、熱い連帯感の裏返しと解していただきたい。

<参考文献>

江藤淳 1967 『江藤淳著作集 5 作家は行動する その他』講談社（原著初刊行は1959）。

菅原和孝 2002 『感情の猿 = 人』弘文堂。

ドゥルーズ、ジル & ガタリ、フェリックス 1994 『千のプラトー——資本主義と分裂症』（宇野邦一他訳）河出書房新社。

——— 1997 『哲学とは何か』（財津理訳）河出書房新社。

西井涼子 2001 『死をめぐる実践宗教——南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティヴ』世界思想社。

ハイデッガー、マルティン 1994 『存在と時間 下』（細谷貞雄訳）ちくま学芸文庫。

Jackson, Michael 2005 *Existential Anthropology: Events, Exigencies and Effects*. Oxford: Berghahn Books.